《海外研究室事情 (45)》

Astronomy Department, University of California at Berkeley

カリフォルニア大学バークレー校天文学科

http://astron.berkeley.edu/

カリフォルニア大学は，カリフォルニア州にある巨大な公立大学です．全部で9校から構成されています．南から順番にサンディエゴ，ロスアンゼルス，サンタバーバラ，サンタクルーズ，リバーサイド，サンフランシスコ，バークレー，デービスです．この中でサンタクルーズ，リバーサイド，サンフランシスコ，バークレーの4校がベイエリアと呼ばれるサンフランシスコ周辺にあります．大学本部はバークレーにありますが，各校とも個性的で特色のある教育・研究活動を行っています．

著者は，平成12年10月16日から平成14年10月31日までの2年間，日本学術振興会海外特別研究員としてカリフォルニア大学バークレー校天文学科で研究生活を送る機会に恵まれました．早いもので帰国後すでに半年以上が経ってしまいました．本当に時の経つのは早いものです．昨年度の冬は，新潟の鉛色の空（＋雨，雪，強風）を見上げながら，カリフォルニアの青い空が懐かしくなったものです．

さて，私の在籍していた天文学科の話から始めましょう．バークレーの天文学科の規模はアメリカでも大きいほうだと思います．研究スタッフ，ポスドク，大学院生あわせて約100名（うち研究スタッフ約40名）が，様々な分野で研究を行っています．また，物理学科，Space Science Lab. (SSL), Lawrence Berkeley National Lab. (LBNL) などの他の部署にも多くの天文研究者がおり，活発に交流しています．渡米後まず驚いたのは，定例セミナーの多さです．基本的に毎日セミナーがあります．1日2回開催される曜日もあり，全セミナーにでていると，研究時間もなくなるほどです．そのためか，幾つかのセミナーは昼食時に開かれ，みんなサンドイッチ持参でやってきます．セミナーのための講師旅費も充実しているようで，学外から多くの講師がやってきます．おかげで，バークレーを離れずして，様々な分野の最新の成果を聞くことができます．みんなセミナーを情報収集の場と考えているようで，教授クラスのスタッフも積極的にセミナーに参加しているのは非常に印象的でした（反面，論文を読まない傾向も見られますね）．大学院生を含め，みんな積極的にビジターと交流を図ろうとしていることも印象的でした．このような交流から共同研究の種を見つけているようです．著者もこの環境のおかげで，バージニア大のZhi-Yun Li博士と共同研究を始める機会を得ることができました．セミナー以外にも，毎朝コーヒータイム（コーヒーを飲みながら駄弁る時間）や，午後，軽食が用意される曜日もあり，研究とは関係なく，他のメンバーと交流する機会も用意されています．セミナーを含め，様々な行事が有機的に運用されていると感じました．学科全体の将来計画も活発に議論されているようで，その会議の議事録を自由に閲覧できるようにコーヒー部屋においてあったりしています．中を覗くと，各スタッフの研究業績，学科運営への寄与などが詳細に分析され，問題点も列記されています．私が見た書類には，理論グループの問題点として，Facultyメンバーの高齢化が挙げられていました．それを反映してか，滞在中に4人の若手スタッフ（全Faculty数8名）が新規採用されました．やることが早いです．

次に著者の研究生活についてお話しましょう．著者は学振海外研究員として，星形成に関する理

論的研究を行っていました．2年も続けて海外で研究する機会はこれが最後かもしれないので，アメリカのポスドク生活を体験してみようと思い，滞在費は日本から持ち込みでしたが，ポスドクとしてChristopher McKee教授のグループに参加させていただきました．が，これが予想よりも大変でした．McKeeグループには，ローレンス・リブモア国立研究所のRichard Klein博士（バークレーの客員教授）も参加しており，毎週火曜日4時過ぎから全員参加のグループミーティングがありました（スタッフ2名のため，2年間休みなしでした）．私も含め，総勢7名のグループでした．ミーティングでは，各自の研究課題の進展状況が報告され，活発な議論が展開されます．毎回教授以外の全員に発表機会が与えられるので，英語の苦手な著者は毎週の用意が大変でした．一人平均30分程度の持ち時間ということになっていましたが，（激しいツッコミに耐えているうちに）1時間を過ぎることもあり，夜の8時すぎまで続くことも少なくありませんでした．（みんなタフです）．ただ，このミーティングは大学院生にも鬼門であったようで，ミーティング終了後，隔週で夕食ついでにバーに行き，「今日も無事に生き残った」ことをビールで祝っていました．みんなスタッフをよく観察しています．飲みながら，教官の物まねが炸裂します（万国共通か？）．

Berkeleyのシンボル Sather Tower（Campbell Hallにあった著者のofficeから撮影）

最後にバークレーの町の印象を紹介し，本稿を締めくくりましょう．アメリカの他の町のことにはそれほど詳しくありませんが，バークレーは車がなくても快適な生活ができる，アメリカにしては珍しい町のようです．また，西海岸に位置するため，アジア系の移民も多く，食事には困りません．周囲には危険地帯がありますが，アメリカにしては比較的安全ではないかと感じました．しかしながら，渡米1年後に起こった9/11テロをさかいに（アメリカ経済もピークを過ぎたこともあり），校内で強盗傷害事件が増加してきました．主要な事件は逐一メールで報告されてきましたが，初めの1年はほとんど送られてこなかったのに，後半1年は，月1回はメールを受け取りました．9/11テロ後には，外国人への待遇もかなり悪化しました．特に，様々な公的手続きにかかる時間が非常に長くなりました．例えば，アメリカに長期滞在し，働く場合には，社会保障番号(SSN)を取る必要があります．これがないと，銀行口座も容易に開けません．私は事件前に取得したので，すんなり行きましたが，テロ後は取得審査が厳しくなった上に，審査にパスしても，発行に1ヶ月以上かかったり，車の免許証も試験合格後，半年以上届かない（場合によっては1年）ということを聞いたりしました．1，2年程度の滞在の場合，最初の1，2ヶ月に生活立ち上げがスムーズに運ばないと非常に不自由です．これからポスドクなどで渡米予定の人は事前に十分に調査しておくことをお勧めします．（日本と違い，重要なことがすぐに変更されます．）

バークレーでの2年間の研究生活は私にとって本当に貴重な体験でした．このような機会を与えてくださった，バークレーの皆さん，日本学術振興会，新潟大学の同僚の方に感謝いたします．